大の勉強嫌いが何故か化学者になる話

滝川　浩郷（農学部）

私は現在、農学部の教授を仰せつかっているものの、模範的とは言い難い駒場生だったので、駒場生に向けて何かを書くことには大いに抵抗がある。しかしながら、お世話になった方からの依頼なので、約 40 年前を思い出しながら、駄文を書かせていただく。

故郷名古屋から上京して半年間だけ、私はそこそこ真面目な駒場生だった。ただし、その実態は、慣れない都会で縮こまり、大学に通う以外にやることがなかっただけである。しかし、必然的と言うべきだが、都会の生活に慣れるにつれて生来の勉強嫌い・怠け者の本性が徐々に頭をもたげ、模範的とは言い難い大学生生活を謳歌するに至った。ここで武勇伝を語るつもりはないが（というか書けない）、そんな自他ともに認める勉強嫌いの怠け者が、何故、東京大学教授を拝命しているのか？　正直、私自身も理解できないが、「恩師との出会い」がなければ絶対にこの道を歩んでいないことだけは確実である。というわけで、怠惰な駒場生が「恩師との出会い」を通じて化学者になった過程を振り返らせていただく。

現行制度とは建付けが根本的に異なるが、我々の時代にも進振りはあった。当時も、駒場生にとって最重要イベントであったが、私は進振りに対してあまり執着心がなかった。なぜならば、学問に対する憧れや興味が希薄で、将来に対する明確な夢や希望を持っていなかったからである。しかし、そんな私でも１年終了時の成績には凹んだ。怠惰な生活を完全に棚に上げての話ではあるが、平均点が自身の想定より数段低かったからである。当時の進振りは「一発勝負」だったため、私の平均点で“安心して”出願できる学部・学科は相当に限られた。「さすがにこれはまずい」と焦り、2 年前期は柄にもなく真面目に勉強した（あくまで、私としては）。残念ながら学問に目覚める機会とはならなかったが、結果的に平均点の大幅アップに成功し、農学部農芸化学科（以下、農化。現在の生命化学・工学専修）へと進学できた。ちなみに、世は第一次バイオブームであり、バイオテクノロジーを牽引する農化は高い人気を誇っていた。（昨今の状況に驚きを禁じ得ないが、底点は薬学や理学部化学と大差なかった。）ただし、私が農化を選択した理由はバイオへの憧れではなく、「まあいいか」的な甚だいい加減な感覚的選択だった。

進振り後の私がどうなったかと言えば、品行方正とは言い難い生活を続けていた。学問に興味が持てない状況も継続中であったが、日々の講義はさておき、いわゆる学生実験を通じて、実験化学の王道は学んだつもりである。広範な農芸化学領域に関連する基礎的な実習実験から大いに刺激を受けたと認識している。ただし、それらを以てしても私の勉強嫌いは払拭されず、「自分は学問・研究には向いていない」と考えるようになっていた。

４年次には卒業研究のために特定の研究室に配属される。農化には選択肢が豊富（当時は 16 研究室、現在は 30 以上）だったが、結果的に、この豊富な選択肢が私にとっては幸いだった。先述のように、世はバイオブーム。応用微生物学系の研究室が人気だったが、生命の根幹たる遺伝子をいじることに軽い抵抗感を覚えていた私は、漠然と“化学”寄りの研究室を選ぼうと考えていた。そして、有機化学研究室を選んだのだが、私は決して有機化学が好きでも得意でもなかった。では、なぜ有機化学研究室を選んだのか？

正直、研究に情熱を傾けられそうにないと思っていた私は、学部卒での就職を想定し、研究内容云々ではなく、１年という限られた時間を楽しく過ごせそうな研究室を選ぼうと考えていた。現在の立場から言えば、決して推奨できない選択手法なのだが、決め手となったのは担当教授と研究室の雰囲気であった。森謙治教授は、成績評価も含めて決して優しい先生ではなかったが、何しろエネルギッシュだった。講義では、よく通る大きな声でしゃべりまくり、精力的に黒板を書きまくっていた。加えて、所属学生による研究室紹介イベントの雰囲気が良かった。要するに明るかった。このような何ともいい加減な直感だけを頼りに、好きでも得意でもない有機化学を選択したのだから、我ながら大したものだ（笑）。そして、この選択は結果的に正解だった。

有機化学研究室に配属されたものの、有機化学（だ

けではない）の学力に欠ける私は、「そんなことも知らないの？」「研究室史上稀に見るおバカ！」などと、先輩方から大いに弄られた。ただし、陰湿さの欠片もないとにかく明るい弄りで、むしろ、無能さを笑い飛ばすような明るく前向きな雰囲気が大いに気に入っていた。また、幼少期から比較的手先が器用で図工や技術が得意かつ好きだった私には、日々の有機合成実験が極めて新鮮に感じられた。ある特定の有機分子が、自分の遂行する研究実験によって姿形を変える。また、モノを言わない分子と各種分析によって対話し、望んだ構造が構築できているかを論理的に検証する。当然ながら、これらの一連の作業は手作業であり、先生や先輩方からの指示・指導はあるが、ほぼ全てが実験者に委ねられていると言って過言ではない。研究室配属前には全く想像していなかったのだが、そこには、自分の手で何かを創造していく喜びに満ちた素敵な世界が存在していた。

恩師森先生は何事もストレートに話す方であった。（彼の辞書に「オブラートに包む」という文言は存在しない。）私が4年生の5月頃、そんな恩師から「君は、勉強はイマイチだが実験の腕はいいね。」というお褒めのお言葉をいただいた。（これは立派な褒め言葉です。）「豚もおだてりゃ木に登る」とはよく言ったもので、すっかり気を良くした私は、もう少しこの場に留まりたいと思い、当初方針を変更、修士課程進学を決意した。しかし、そこには極めて大きな問題があった。院試の存在である。様々な勉強を可能な限りサボってきた私にとって、全9科目（現在はもっと少ない）に及ぶ院試は正にそそり立つ壁であった。また、倍率も現在よりはるかに高かったため、相当に厳しい戦いになることが予想された。しかし、こうなった以上、勉強嫌いとか言っている場合ではない。死ぬ気で勉強した。恐らく大学受験時より勉強した。おかげで何とか合格できたのだが、面接の際、恩師から「合格（うか）ったらどんな研究がしたい？」と聞かれた瞬間の安堵感・脱力感を今でも覚えている。ちなみに、「合格ったら～」の質問は合格を意味する「通し」であった。（古き良き時代です。）

その後はどうなったかと言えば、幸いなことに、博士課程修了まで概ね順調な大学院生活を送ることができた。ただし、アカデミアは目指さなかった。正直、少なからず才能があるかもしれないと錯覚しかけたこともあったが、以下の理由で我に返った。

① 恩師が怪物：規格外の能力・エネルギー、信じ難いほどの努力と献身。到底真似できない。
② 先輩が天才：恩師は別格としても、5学年上に天才的な先輩がいた。張り合うのは無理。
③ 自分が勉強嫌いの怠け者。

というわけで、アカデミア志向のなかった私は、恩師からのありがたいお誘いを無下に断り、博士課程修了と同時に某社へと就職した。ところが、根性なしの本性を如何なく発揮した私は程なく翻意、アカデミアへの挑戦を決意した。多くの方々にご迷惑をお掛けした本件の経緯は書きませんが、最終的には、恩師に拾っていただいた。「今度は文句言わね～だろうな！」とのお言葉とともに。

以来約30年間、化学者としてご飯を食べさせていただいている。また、数奇な巡り会わせにより、2018年より出身研究室の第5代教授を仰せつかって現在に至っている。

58歳になるおっさんが、だらだらと過去を振り返りつつ伝えたかったのは、「行き当たりばったりの人生も意外と悪くない」ということです。明確な夢や目標があり、それらの実現に向けて努力することは素晴らしいと思いますが、一方で、若き日の私のように、それらを見出せないことも往々にしてあるものです。しかし、私が経験したような運命的な出会いや人生の転機は至る所に転がっているはずです。良くも悪くも、人生は思い通りにはいきません。しかし、何が起こるかわからないから面白いのであって、すべてが予見可能な未来は面白くないのではないでしょうか。

と言うわけで、進振りが皆さんにとって最重要案件であることはわかりますが、少し肩の力を抜いてみても良いのかもしれません。数年先に控える研究室・ゼミの選択やその先の進路選択に関しても同様かもしれません。

Life is like a box of chocolates. You never know what you are going to get.